赤裸々な束子（セキララなタワシ）

第一回

BY ナカザワヒデキ 1992

表（おもてのワタシ）

Hideki Nakazawa

連載してきてこう言うのもナンではあるが、「しーじー○○」というパロディまんがはとくに最後の方はそんなに面白くなかったかもしれない。ちょっとこの場を借りて考えていたことなどを述べてみようかと思う。

連載開始の頃はいいアイディアができたと思い、じつはホクソえんでいた。一回目、二回目は自分でも面白かったと思うが、三回目、四回目あたりからだんだんマンネリ化してきてしまい、五回目、六回目ともなると結構くたびれてしまったのだった。毎回次号を取りあえず予告

「しーじー○○」の顛末

するというシステムが自業自得の悪循環を生み、新展開のチャンスも無いまま次のシメキリを迎えてしまっていたのである。しかも、私は他の仕事にも忙殺されて毎回吟味の暇も充分とはいえず、シメキリにも結局間に合わず、とくにYさん、Tさん、その節はまことに申し訳ございませんでした。と言いつつ本稿もすでにシメキリまであとマイナス3日である。

どうしてパロディまんがは思ったほどうまくいかなかったのだろう？　との疑問に対する答えはなんと先月号のガロに載っていた。「パロディというのはやりはじめが面白いもので、パロディがパロディとして認められるとつまらなくなる。（つげ義春のマンガにパロディが出るわけ／赤瀬川原平）」　な～んだ、そうだったのか。言われてみれば確かにそうである。

しかし連載を中止してしまったことに心残りも無いわけでは

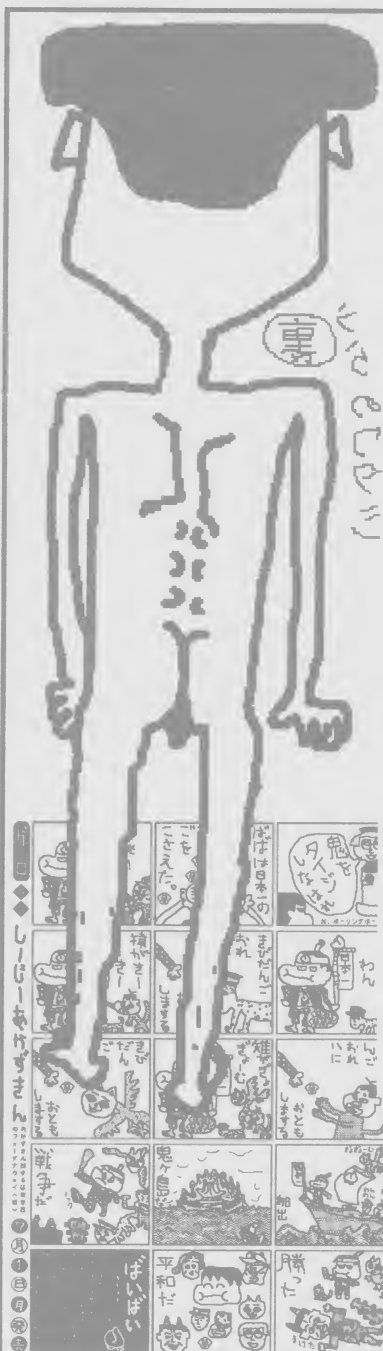
跪くヌードの自画像 1910

SCHIELE

やはり、性器は隠すべきであったか!?

昨年はヘア解禁の年で、それをテーマにしたイラストの依頼もあったりしてそれなりに面白かったわけだが、さる有名な美術雑誌ではやはり性器は隠すべきであった。

ヒカシューのファーストアルバムの名チューン「雨のミュージアム」は「エゴンシーレのポーズをまねて～」という歌詞ではじまるのだが、調子に乗って私もエゴンシーレのポーズをまねてみたら、性器を露出するハメとなってしまったのだ。当時私が連載していた美術○○では、見開きの右ページが文、左ページがヴィジュアルだったが、エゴンシーレのポーズをまねる自分の写真を左ページに載せたところ、問題がハッカクしたのである。右ページはちょうど東急Bunnkamuraで開催されたエゴンシーレ展にかこつけての記事であった。

もちろん、私もただポーズをまねただけの写真じゃ

ない。最後に予告したままになってしまった「巨人の星」の3D立体視は、是非完成してみたかったものである。構想としては遠くに見えるピッチャーの投げた球が、コマを追うごとに眼前に近づいて見える、ただそれだけのアイディアだったのだ。…が、じつはこのアイディアはすでに他で使ってしまった。だから実現できなくてもよくなってしまった。他とは翔泳社から出たばかりの（ハズの）「Mac派DTP倶楽部」というムックである。私以外にもガロ連載中の方が執筆しているので、このさい宣伝しちゃおう。翔泳社刊PC-PAGE 26号「Mac派DTP倶楽部」定価1600円。よかったら買ってネ。

…話が脱線してしまった。

もうひとつ、心残りとしては連載開始時における当初の反芸術計画がある。私はやっぱり反芸術が好きで、デュシャン、ジャスパージョーンズ、赤瀬川原平といった面々にはずいぶん影響を受けたつもりだ。ツマリ普通にオリジナリティを表現することに懐疑を覚え、便宜上パロディと言ってはいたものの私がやりたかったのはパロディではなくレディメードだったのである。そして自分のものでないキャラクター、既成のストーリーを使用することによってある程度完璧なレディメードまんがができるのではないかと考えていた。しかしそれは単発の企画ならうまくいったかもしれないが、連載向きではなかったのかもしれない。

かつてジャスパージョーンズは「初期の作品では、私は自分の個性、心理状態、情念を隠そうと努めた。いってみれば、頑固に自分の鉄砲を手ばなさずに陣地を死守したようなものだが、結局は負けいくさだったようだ。」と語ったという（美術手帖85年7月号）。自分をジョーンズになぞらえるのもおこがましいのだが今回のパロディまんがの場合、あまりにいろいろ不用意で負けいくさと呼ぶ程のことでもない。まあ茶番に終わったとでも言っておこうか。

〈赤裸々な束子・今後のネタ予定〉
★3Dもあきちゃった★一時期ハマったかな漢字変換★コラージュやってはみたものの★である調とですます調★ポパイ画人列伝の肖像画探しの労苦★手がきの仕事を断ったこと

つまらないのでマッキントッシュでだいぶ写真を改ざんした。また肝心の性器はそのまま出すつもりも無かったのでマンガチックにイラストで表現した。しかしどうもそれもイケナカッタらしい。可哀相な編集者はダメ出しをする編集長と私との間で板挟みになり泣きベソをかいていた（ような気がする）。編集長からのガンとした注文は「性器部分をボカスこと」で、まあマッキントッシュ上ではそんなエフェクト処理はたやすいが、どうもそうするとすべてが台無しなのである。むしろかえって強調しているようでいやらしくさえある。というか無邪気な屈託のないアソビのつもりがどうも逆に暗～い反社会的な印象となってしまうのだ。いったんはそのままことが運びそうになったが、土壇場の土壇場で性器を色ベタの丸で隠すことに変更し、これなら無邪気感もそこなわれずいやあヨカッタ、ヨカッタなのである。美術○○編集部の皆さん、その節は御迷惑をおかけしました。みなさんもヘア解禁とはいえども性器表現にはくれぐれも気を付けましょう。

一九九二年五月記

MEGARO MIX

REMIXREMIXREM

ROCK'S DRUG 11

お洒落ジャズ・ファンに一撃を！

私達が編集しているREMIXという音楽雑誌で、先頃ジャズの特集記事を組んだのだが、思わぬ大反響に驚いている。ジャズと言えば、いかにも古くさい、もう遠い過去の音楽のように思われる。しかし、ジャズはクラブ・ミュージックの最新モードとして、20才前後の若い音楽ファンに熱狂的に迎えられつつあるのだ。

彼らが夢中になっているのは、ブランニュー・ヘヴィーズ、ジェームス・テーラー・クァルテット、ロニー・ジョーダン……その他、イギリスのトーキン・ラウド・レーベルやアシッド・ジャズ・レーベルといった、いわゆるニュー・ジャズ系（クラブ・ミュージックとしてのジャズ、つまり踊れるジャズ）のアーティスト達のレコードが中心だ。しかし、最近では若い熱狂的ニュー・ジャズ・マニアが20〜30年も昔のブルー・ノートやプレスティジといったジャズの名盤を中古盤屋で必死になって探す、というような珍現象も起こっているという。それにしても、なぜ若い音楽ファンがそれほどまでにジャズを？

先日、16才の少女から編集部に届けられた手紙には正直言って驚かされた。それはこんな内容だった。「私はフリッパーズ・ギターで音楽にめざめました。最近までネオアコ（ネオ・アコースティック・ポップスのこと）ばっかし聴いていましたが、ちょっと飽きちゃって、聴く音楽がな〜いと思っていたら、父親のレコード棚から大量にジャズのレコードを発見！で、この前、ジミー・スミスの「キャット」っていうレコードを聴いて、もうすっかりオルガン・ジャズのとりこです。」……ガビ〜ン！　しかし、どうやら20歳前後の音楽ファンの中にはこういう恵まれた音楽環境に育った人は少なくないらしい。

他人がどんな音楽に夢中になろうが、どんな音楽の聴き方をしようが、僕は一向に構わないが、「ジャズっておっしゃれ〜！」みたいな奴にはちょっと一撃かましてやりたくなる。前述の手紙の少女は、子も子なら親も親だ。もしも、この子のオヤジがアルバート・アイラー狂のフリー・ジャズ・マニアだったら、この子の将来はまったく楽しみ（?）だったと思う。いや、それは不幸かな？（もしも僕にガキができたとしたら、そいつはロクな奴になんないだろう。ヘンなレコードばっかり持ってるから……。）

若い子の音楽趣味がどんどん希薄になっていってるような気がする。ロックはつまらない……ハウスもピンとこない……ヒップ・ホップも他人ごと……ましてやレゲエは……じゃあポップスかなぁ……あ、ジャズだ！ジャズ！……みたいな希薄さ。彼らは音楽にリアリティーを求めない。その象徴がジャズをポップスとして聴くこと。でも、今におっしゃれ〜なモード・ミュージックなんて聴いてる場合じゃなくなるかも知れないのに。

REMIX　小泉雅史

TRAFFIC OF DANCE GROOVE11

ヒップ・ホップの曲がり角

　先日、ロドニー・キング殴打事件をきっかけにした暴動に揺れるLAのヒップ・ホップ・レーベル、ハリウッド・ベーシックのアーティストが来日しました。ハリウッド・ベーシックは、メンバーすべてが終身刑というラップ・チーム、ラーファーズ・グループをデビューさせるなどで注目を集めたレーベルです。このレーベル・ディレクターをしているのは、パブリック・エナミーやジャングル・ブラザースのマネージメントなどを通じて、ヒップ・ホップ・ムーヴメントに深く関わってきた人物であるデイヴ・ファンケンクラインで、彼は暴動地区のすぐ近くに居住しています。REMIX誌は彼にインタビューを行いましたが、僕はインタビュアーではなく担当としてこれに立ち会って忙しく動き回っていたため、彼の発言は一部しか聴けませんでした。しかし、あまり誘導せずにアーティストがしゃべりたいことをしゃべらせるというREMIXの方針のためか、暴動騒動に対して、熱弁をふるうかという予想に反して、冗談まじりに語り、当事者的意識も希薄なようでした。これは逆に興味深いものです。このインタビューは6月末売りREMIXに掲載されます。

　デイヴによれば、LAでは「あいつをやっつけろ」が「何もかもぶち壊せ」になるが、NYでは「あいつをやっつけろ」は「あいつをやっつけろ」以上にはならないので、LAのような暴動は起こりえないとのことですが、話題は変わって、そのNYのベテラン・ラップ・チーム、ギャング・スターの3rdアルバム「デイリー・オペレーション」（東芝EMI）がリリースされました。これが異常に素晴らしい出来で、これこそがヒップ・ホップだというサウンドです。

　現在ではヒップ・ホップは社会的に認知されるほどに大きな広がりを見せています。MCハマーやアイス・キューブのようなポップ・スターをはじめNWA、ゲットー・ボーイズのようなアンチポップ・スターもいます。若い人はヒップ・ホップを当り前の環境として育っています。そういう状況の中から出てくる新しいヒップ・ホップ・アーティストは、かつてヒップ・ホップがストリートオリエンテッドなマイナリティーの音楽だった頃のヒップ・ホップ・アーティストとは、自ずと意識が違うはずです。つまり、つまらないわけです。そういう状況に対してのベテランの苛立ちが、ベテランをしてヒップ・ホップのオリジナル・マインドを取り戻そうとさせ、ベテランらしからぬサウンド、かつて以上にシンプルかつラディカルなサウンドを生ませているようです。

　同じくベテランのBDPのニュー・アルバムもそうでしたが、ギャング・スターの歴史的な傑作となるだろう新作は、それ以上に絶対的マイナリティーの気骨を示しています。

REMIX　若野ラヴィン

EMIXREMIXREMI

NON STOP CULTURE11

CGと油絵

　たとえば、美術大学で油絵などの専門教育を受けて卒業してみたら、描くべきテーマがなくて困っている人がいる、というのはご存じでしょう。断わっておくと、こういう人に限ってテクニックは人一倍持っていたりする。

　何かと話題になるCGにも同じような現象が指摘されているし、また誤解を呼んでいる。よく、コンピュータが個人の思考法自体を変える、あるいは価値観を変容させる……などとまことしやかに語られるわけだが、そんなわけにいかないのは当り前だ。道具がビジョンまで生み出すなんて思ったら甘すぎる。残念ながら素晴らしいアイディアに満ちたツールの使用法を憶えても、油絵の具の性質や、筆、溶剤の使用法を憶えたけど描くものといえば、海、山、果物の自称絵描きと同じだ。だから技術が目的になっていく。広大で無機質な地平線をバックに、意味もなく透明でテカル球体が浮かんでいるだの、動画でも物体が向こうから飛んで来て、反対側に飛び去るなどのワンパターンが、そういうCGのいい例だ。今の技術だとこういうグラフィックが描ける、商品広告に役立つというような参考例がそのまま代表的な表現になっていることが多すぎる。

　あるCG作家が、日本に何台しかないような高価で高性能な機械を使ってCGを作成し、それを何と、リトグラフにして販売している、などの現状を見るだに、個人的に作られるCGは、いくらハイテクの最先端だと騒いだところで、所詮変わった絵として画廊で展示せざるを得ないような案配だ。実際にCGで風景画を描こう、という本もあるし、CGで描いた絵をフランスの油絵のサロンに出品して、入選したじじいの話も、CGが新手のホビーとして社会に認知されてきていることを、ある意味で裏付けている。3DのCGでコカコーラの缶を描いて雑誌に投稿して喜んでいるアマチュアの人、悲しくはないか。好きでやっているのに、安ギャラでこき使われるイラストレーターが専門学校時代に提出したような絵を描くことないじゃない。

　CGだとかDTPの話でつくづくいやになるのは、とにかくプロユースで、高品質なプレゼンテーションが可能になります、ってなメーカーの宣伝込みの、いわゆるパワーユーザーの談話が多すぎることだ。パソコンが個人の可能性を最大限に切り開いてくれる究極のマシンとしてある、ような幻想が顔を出すたびにアホウドリが鳴く。

　ところで、個人CGって結構漫画向きだと考えるのは筆者だけだろうか。取り込みでもコピーでもペーストでもカットアップでも何でもやって、機械に絵を描かせる。ものすごいアイディアはあるのに、絵はあまり描けない人（そんな人がいるかどうかは別にして）は、ぜひ試してみてよ。CGでイラスト描いて、「クライアント」さんに満足していただくより、面白いと思うんですけどね。

アウトバーン　川畑健一郎

REMIX

Nu Era Music

毎月１７日発売

定価７８０円（本体７５７円）

編集・発行：株式会社アウトバーン〒１１１東京都台東区浅草橋1-3２-6TEL０３（３８６３）４３５０FAX０３（３８６３）４３７０

営業・発売：株式会社青林堂〒１０１東京都千代田区神田神保町１－６２TEL０３（３２９１）９５５６FAX０３（３２９２）７３６８